

川端康成学会茨木大会文学踏査 報告

田中洋子・藤猪玲子

(茨木市立川端康成文学館)

平成二十五年八月二四日(土)～二六日(月)
実施

1 茨木市宿久庄丁『骨拾ひ』の舞台―十三歳から十五歳まで過した地

実施日時：八月二四日(土) 午後一時

三〇分～四時三〇分

午後一時JR新大阪駅集合し、マイクロバスで宿久庄へ向かう。

バスを降りて、宿久庄一丁目に着くと、康成が祖父母と暮らした家(現在の川端富枝氏宅)はすぐ目の前であるが、先に墓地へ行く。

〔注 祖父母と暮らした家の住所は、茨木市宿久庄一丁目十一番二五号、当時は、大阪府三島郡豊川村大字宿久庄一五四〇番地である〕

川端家の垣根に沿った道を進むと、康成の友人だった宮脇家があり、その東に八坂神社が建つ。小学生の康成たちが登校するために集合した場所である。宮脇家は、康成にとって家族の温かさに触れることのできる家であった。夕飯の後、病の床に着く祖父を取り残しておくのをすまないと

思いながらも遊びに行き、ついつい帰りそびれ、十二時を過ぎて友人の家を辞した途端に祖父のことが心配で一目散に家に帰ったという。

その後、約十分坂道を登って行くと川端家の墓所に着く。この日が、前日までのような酷暑でなく、曇天だったことは幸いだ

ったが、墓所は木立に囲まれて空気が少し違っていた。墓所には、十八基の墓石があり、祖父三八郎と後妻カネ、二男栄吉(康成の父)が一つの墓に、隣には三八郎の長男常太郎の、その隣には三八郎の先妻(常太郎の母)の墓が建っている。

昭和四二年に康成が建てた菩提塔に花を供えてお参りをしたあと、『骨拾ひ』の舞台である村の集合墓地へ向かう。墓地は小山状になっており少し登って進み、繁茂した木々の間から少し下方に目をやると『上の池』が見えるが、道はないので池畔まで行くことはできない。

元来た道を戻り、川端家の菩提寺である紫雲山極楽寺(宿久庄一丁目二〇番二号)を訪ね、川端家の祖先で確認することのできる最古の人物五兵衛宗順(五郎兵衛宗順)の墓に参った。

少し戻って、極楽寺の後方に広がる田畑へ向かう。豊川村一帯では、灘や西宮に出す酒米を作っていたという。また、康成少年が、自然に親しんでいたところだろう。

この場所から《下の池》へ行くこともできるのだが、事前の下見で池を確認しておこうとしたところ農作業をしていた人から、「危険！止めなさい！」と注意された。

【注 平成十五年五月《上の池》《下の池》の池畔まで行き撮影してガイドマップに掲載】

その後、川端富枝さんを訪ねた。康成の祖父亡き後、家を買った川端岩次郎の息子の夫人である。年齢は、九十歳をとうに過ぎ、車椅子に乗っておられたが、庭で康成との思い出、川端家の先祖、如意寺、地域の歴史など、滔々と語られる。庭のようすは、康成少年が暮らしていたころとはかなり変わったということであったが、康成少年が昼寝をしたという石は必見である。

その後、『大黒像と駕籠』に書かれている紫金山慧光院（如意寺）（室山一丁目七番八号）へ。明治四三年、祖父が川端家の持ち寺であった黄檗宗如意寺を手放し、浄土宗の紫金山慧光院に建て替えられることになった時、康成の家に預かったという

黄檗宗の本尊虚空蔵菩薩を拝見した。

宿久庄踏査終了、川端康成文学館へ、館内を見学。

2 茨木市中心部市街地踏査

実施日時：八月二十五日（日）午前九時三〇分～正午

○分～正午

天気予報のとおり雨。集合場所へ行くと、参加予定者全員十一人がすでに来られていたのに吃驚。「折角の機会、この機会を外したらいつ来られるか」と仰ってください。

先ず、康成の母校旧制茨木中学校（現・大阪府立茨木高等学校）へ。正門を入ると左手に「以文会友」の碑がある。昭和四年一〇月二六日、川端夫妻の出席のもと除幕式を行った。康成は、論語の言葉で、『文』は文学という狭い意味でなく、文化一般、或いは道徳・倫理、或いは真の心・美しい心・優しい心により、『友』と会い人間が結ばれる、結ばれ合うという意味だと述べた。また、茨木中学校の正門は、校舎の建て替えにより場所が移っているが、

康成在学中の正門跡へ。現在は、塀になっており全くそれとはわからない。

その後、放課後日課のように通った堀書店、寄宿舎生の頃に通った風呂屋跡、英語の倉崎仁一郎先生の墓のある本源寺を確認。その間、雨は、強くなったり弱くなったりずっと降り続いていた。

漸く、茨木の商店街に入り、虎谷書店跡をはじめ、中学時代の日記に書かれていた店など紹介しながら歩く。アーケードがありほっとしたが、全員靴の中は水浸し。商店街の交差する場所にある石丸写真館（当時、茨木中学の写真撮影を担っていた）の前で、凄く大雨に気づく。これ以上遠くへ行くのは諦め、茨木御坊（東本願寺茨木別院）だけは是非と思ひ、本堂にも上がった。『師の柩を肩に』に書かれた倉崎先生の葬儀が生徒たちによって行われた寺である。

3 京都市内「古都」の舞台と谷崎潤一郎旧居「石村亭」訪問

実施日時：八月二六日（月）午前九時～午後二時

阪急電車京都線烏丸駅に集合、京都市指

定有形文化財指定の秦家はたけ(京都市下京区油

小路仏光寺下ル)に向かう。秦家は、明治

二年に薬種業を創業、昭和六一年まで「奇

鷗丸」という小児薬の製造・販売を行って

いた店舗と住宅である。障子や襖を風通し

の良い葺戸むきどや簾戸すだれに替え、簾すだれを下げ、座

敷には藤筵とうしんを敷き、京都の夏を凌ぐため

の設えがなされていた。通された居住部の

部屋の敷物はひんやりと心地よく、奥庭の

木々の緑は涼やか、とても、京都の街中と

は思えない。

この家で生まれ育った秦めぐみさんか

ら、川端康成が訪ねてきたときのことにつ

いてお話を伺った。昭和三十六年の九月末か

十月初めに川端は京ことばの取材に訪れ、

めぐみさんの父と戦争未亡人で実家に帰

っていた伯母に会って、二人に話を聞いた

という。その時、康成は、奥庭の降蹲踞おちつくばいの

石の間に咲くすみれに気付いたそうだ。い

つまでも縁側や座敷に座り、庭を眺めてい

たかったが、めぐみさんの、「冬も是非来

てみてください」との言葉を背に、秦家を

辞した。

その後、タクシー七台に分乗し、下鴨神

社御蔭通へ。糺たぎすの森の表参道を歩き、途

中右に折れ、泉川に架かる小さな石橋を渡

ると石村亭いしむら(後の潺湲亭)である。谷崎潤

一郎が、昭和二四年〜三二年まで暮らし、

『鍵』『夢の浮橋』『新訳源氏物語』などを

執筆した住まいである。

ここで、二班に分かれ、半数十四人が石

村亭へ。松子夫人の同級生の夫が、(株)

日新電機の役員だった縁でこの会社に譲

り、できるだけこのままでという谷崎の希

望を受け入れ、管理に努めてきたとのこと

で、担当者梶間氏に説明・案内いただく。

母屋では台所やふる場も、外に出て茶室、

書齋にしていた離れを見学。庭は池を中心

とする林泉の佇まい、滝の落ちる築山も配

され、まさしく、『夢の浮橋』の世界だっ

た。別の班は、道を隔てた隣家、川端が『古

都』『美しさと哀しみと』執筆のために借

りた下鴨泉川邸へ。平成十九年頃までは、

所有者が替わりながらも、管理されていた

が、譲渡されて現代数寄屋造りに建て替え

られた。川端の借りた部屋から見えた紅葉

の古木と灯籠は残されたが、その後再度売

却。見学は叶わず、堀の間から庭を垣間み

るだけにして、下鴨神社(賀茂御祖神社)

の見学や昼食、十二時三〇分に再び、石村

亭に集合し、見学を交代。

午後二時この日の予定は終了したが、希

望者のみ、下鴨神社の官司新木直人氏との

懇談の機会を得た。実際に主に交渉のあつ

た谷崎氏について話を伺った。戦後の葬祭

復活には、谷崎の尽力も大きかったという

4 終わりに

三日間に亘り、できる限りのご案内をいたしました。が、心配していた猛暑日とならず幸いでした。拙い解説でしたが、ご参加くださった皆さまありがとうございます。

川端康成学会大阪文学散歩印象記

藤元 直樹

むしゃくしゃして入会した。今は反省している。あ、どうもはじめまして藤元直樹と申します。明治翻訳文学の底辺部分を探索しているため文学史の稜線を担う川端康成と相見ることなどないものと思っていたら意外なところで、その存在に行き当り吃驚。勉強させていたどころとやってきたところで更に驚愕。暑い盛りによりよって大阪、京都を歩きまわると、正気の沙汰とは思えません。しかも、その企画に30名近くの参加者が……。なんとという鉄の規律。これはもう少なくとも十数人は川端康成化が達成されていないと総括を求められたあげく困境

の長いトンネルに埋められているとしか。とかようにいちびった文章を書かずにはおれないのが、関西人……。のはずなんやが、その反証として、川端康成が屹立していて迷惑なことこの上ない。ほんまに大阪の人なんか。そういつたあさましい疑問を打ち砕く誠に見事な現地調査が今回の茨木探訪。

農村というが無闇に鄙びた土地を想起させられてしまいがちなのだが、都会の喧騒から程遠く距離を置いた郊外の趣が宿久庄にはあり、茨木の街もまた、人間味を感じさせる規模のコミュニティとして川端を育て世に送り出した土地である。川端文学館作成の充実した資料集と館長の懇切な御案内はそのことを情容赦なく御教示下さったのでありました。

ところで、刺激的なことは、大阪や京都に任せ、住まうことに特化しているのが現在の茨木なのだと思いましたが、もうすこし遊び心があつたほうが楽しいのではないのでしょうか。めざせフェティッシュ・シティ、ワンダー川端ランドなんてどうでしょう。片腕オブジ

エの並ぶ道を整備。さらにCTスキヤナのデータを3Dプリンタで出力して川端ゆかりのポイント毎に銘板ではなく川端原作映画出演女優の片腕レプリカを生やすのである。有馬稲子・山本富士子・久我美子・香川京子・岡田茉莉子・北原三枝・岩下志麻・吉永小百合・加賀まりこ・八千草薫の顔は出さなくとも、手ぐらい出してくれませんか。谷崎潤一郎ゆかりの芦屋市(「アシヤ」だけに)、足を並べ始める前には是非、えつ、そんなマニアには、来て欲しくありませんか、そうですか。

京都と川端康成—文学踏査印象記にかえて

小曾戸 明子

夏の茨木大会の文学踏査三日目は、京都の『古都』の舞台と谷崎旧居「石村亭」で密度の濃い一日となった。川端の親しんだ家や森を感じながらの京都は異なる情趣となった。川端は取材と執筆のために家を借りて過ごした。年譜によると昭和36年63歳の秋。十月から『古都』を107回にわたり新聞連載。

前夜の宴の中で研究紹介がされ、その論稿『古都』成立考―その構想と改稿について―を読むと先行研究など40の引用があり、改めてこの学会の研究水準を知る。と共に京都という場所に抱かれるように対峙し、苦闘した川端の息吹も伝わってくる。主人公娘の家決まらず宿無し娘で弱った、と秀子夫人宛書簡(S36・10・4付)に記した川端は

「旧家の若い女性を主人公にかわいらしい小説を書いてみたい」との構想に、取材で「家」を見出して描く糸口を見つけたようだ。その家(寒家)を訪れた吾々は、奥行きのある夏でも涼しい居心地の良さにくつろぎつつ円熟した女性の説明に聴き入った。

谷崎の旧居は管理が行き届き、見学できたが、川端の暮らした隣家は塀の外から垣間見るのみであった。谷崎の源氏物語訳について「あれは江戸町人のことば」と対峙するかの意識を持っていた川端は、晩年自らの意思を伊吹和子に打診している(『川端康成 瞳の伝説』)。一方で『源氏物語』を現代語に翻訳するためにこの一年間ほど読み親しむに

つれて、現代訳の不可能を感じ強まるのに合はせて、その不必要も感じ強まった(昭和43年12月「茨木市で」と冷静に明解に記されている。

夏の三日間の記憶を遡りつつ改めて求めた『古都』の文庫(平成25年9月10日102刷)一冊のあとがき(昭和37年6月14日)に川端自身の自己開示を読むと、「私の異常な所産」にもかかわらず(それ故にか)京ことばへの好み・自負がひたひたと迫ってくる。

「天の星を引っぱるようなこと言うて」

金森範子

羽鳥徹也先生から、「では『篝火』のなかの(澄願寺)は、どのように考えたらいいのでしょうか?」と質問をいただいた。私は「菊池寛氏の『恩誓の彼方に』を参考にされたかと……」と答えた。それは、第二十八回川端康成学会(2015)で、『十六歳の日記』五月八日の記述に、宿久庄の『極楽寺』と思われるお寺が―西方寺―と表現され、『篝火』に書かれている―澄願寺―は、実際には『西

方寺』であると指摘し、初代のいた岐阜の寺名が極楽寺の代わりに使われたのは、川端二十七歳のみち子への熱い想いであると発表したことに関連しての「質問であった。先日、ぼんやり本棚を見ていた私は『感情裝飾』(精選名著復刻全集 近代文学館50)の背表紙に、―二十年―澄子―という、私のメモを見つけた。「村は野蠻で淫亂だった。」と書き出される「二十年」の主人公の名前である。野末明氏の『康成・鷗外研究と新資料』(2007、11 笠倉社)に、河合澄子のこと詳しいことも連鎖的に思い出した。

二冊を気ぜわしくめくっていた私は『感情裝飾』の広告に目を止めた。鈴木善太郎訳「モルナー傑作選集書目」と書かれ、「第一編 リオム(八場)」「世界一の人気者モルナー! 彼フエレンク・モルナーの世界的名声は一九一四年より翌年に掛けて伯林自由国民劇場にての「リオム」の上演からである。此の大劇作家の名戯曲の移植は日本劇場及読者の一大福音である。」とあった。『感情裝飾』の広告欄については、独影自命か日記かで康

成氏自身が書かれていたことを思い出した。

私は川端作品に限って、名称の付けられ方に関心がある。『僕の標本室』という題名はみごとだと思う。昭和のころ、岐阜公園の名和昆虫研究所に、私も行ったことがある。標本は現在のように豊かな色あいではなく、ガラスケースに並べてあったが、川端氏は「新晴」のなかで標本室ということばを二回使われている。本の題名につける賞があるなら、私は『僕の標本室』に最高賞を与えたい。

二〇〇八年、川端文学研究会が徳島で開かれたとき、徳島県立文学書道館のカウンターにポツンと一冊置かれた『北條民雄選集』の「初夜」(2002)のこと(は文庫)に気づいた。不思議に思いながら帰りのひとり旅に買った。昨年、文庫本「定本北條民雄全集上下巻」(川端康成・川端香男里編纂 創元ライブラリ 1986)を手にして、徳島のあそこに「いのちの初夜」のあった意味を理解した。そのとき私は、『三分紀行』(稲葉現潮師の私家版 1926)を読んでいて、北條泰時という字を何回かとらえていた。「そうだ! 北條民雄の北條は、

北條家の北條だ!」と楽しかった。

はじめに戻る。①川端氏が岐阜を訪問されたのは大正十年、二十三歳の時。②それから四年後、『十六歳の日記』が発表され、③『篝火』はその前年に発表されている。つまり『十六歳の日記』の発表は、④岐阜訪問の後であった。これがキーポイントである。もうひとつ、『篝火』のみち子がいた澄願寺が、西方寺であると解明されたのは、昭和四十七年五月末のこと。それ以前に『十六歳の日記』を説きざれていると、この話ほうるさいだけかもしれない。

ところで折りも折り、『十六歳の日記』の同じ五月八日のなかで、ちよつといい記述を見つけた。おみよさんが言っている。「そやかて、ほんがおいやすがな。そんな天の星を引っぱるようなこと言うて気をもむのは、病の毒でっせ」と。

川端文学の茨木大会に、直前になって参加できなくなり、以前に独り歩きした宿久庄を思い出しながら書いた。私の宿久庄が眩しい。

川端康成の周辺の作家―野上彰訳詩 オリンピック讃歌―

高比良 直美

写真展「昭和」が日本橋三越本店ギャラリーで、十月二日から七日迄開催された。木村伊兵衛・土門拳ら十二人の写真家が昭和の戦前から戦後高度成長時代までをとらえている。ポスターに使われている林忠彦の写真には「銀ブラの復活 銀座昭和二十五年―銀座が戦災の爪痕をようやく払拭し、シヨウウィンドウをながめながら歩く、戦前の平和な時代の『銀ブラ』が戻ってきた」とある。一見ビジネススマン風の、背広に帽子、丸めたパンフレットを握った手に鞆をさげたほっそりとした男性と、ふんわりとした髪をなびかせ、パンツスタイル、ジャケットを腕にかけ、その手に丸めた本を持った女性が、腕を組み、柳並木のある銀座の歩道を歩いている。女性は晴れやかに顔を上げ、胸を張っている。まさしく「復興への道」を歩み始めた素敵な二人である。実はこの二人、野上彰と、律子夫人だ。野上彰の長女藤本ひかりさんから連絡

をいただいて知った。

詩人を志していた野上彰が、川端康成と出会ったのは碁の世界においてだった。日本棋院が昭和十二年に「囲碁春秋」を創刊し、その編集長を野上は任されていた。文人囲碁会を計画し、昭和十三年、村松梢風が初段になった祝賀会が日本棋院で開かれた折り、野上は川端康成と知り合っている。その後は川端を師と仰ぎ、家族ぐるみの交流が生涯続いていく。昭和十八年に日本棋院を退職。詩・訳詩・童謡・翻訳などの創作活動に入ってゆく。詩集「幼き歌」所収の年譜には、この年に松本かつぢの紹介により「少女の友」「新女苑」などに詩・童謡を書くようになったと記されているが、「ジル・マーチン物語」（実業之日本社から昭和四十年再販されたもの）の「あとがき」に「生まれてはじめて、原稿料というものをもらったのは、実業之日本社から昔出していた、△少女の友▽という雑誌に、△ニールスのぼうけん▽を絵ものがたりにした原稿だったのです。」そんなわけで、三十年も昔から僕とは縁の深い出版社から、△ジ

ル・マーチンものがたり▽が、装いを新たに世に出るといふのも、ふしぎなめぐりあわせというよりないでしょう。」とあるように、実業之日本社との縁は昭和十年頃に遡る。安永一に誘われて碁の仕事始めた時期と重なる。絵本画家松本かつぢは、安永一の義理のいとこである。戦後は三木清の意思をついで「火の会」を立ち上げ、プロデュースする立場で、著名な芸術家や、芸術を志す若者を鼓舞した。この頃、実業之日本社に入社したての速水律子と知り合い行動を共にし、結婚している。昭和二十六年三月には「火の会」を解散。その後野上はエンターテイナーの才能を発揮し、ラジオ・テレビへと活躍の場を広げて行く。

昭和二十五年の「銀ブラ」復活の写真は、戦後の理想主義といわれる「火の会」の活動を経て、戦後復興の新たな道に進み出そうとする二人を写し出していたのである。野上彰四十一歳、律子二十七歳。

ところで、野上はバラマ作詞サマラ作曲の合唱曲「オリンピック讃歌」の訳詩を手がけ

ている。一九六〇年東京で開かれた「〇〇席上、天皇陛下」臨席の下に野上彰の訳詩によって演奏され、一九六四年東京オリンピック大会の開会・閉会式に正式に採用された年譜にはこの年に訳詩したことになっている。二〇二〇年東京オリンピック開催が決まり、今後「オリンピック讃歌」に親しむ機会も増えるだろう。写真展「昭和」のポスターに使われた写真は、知らずして実にタイムリーな選択だったのである。

「師」からの言葉

東雲かやの

高等学校の国語教員になって、十年以上が経つ。一年生の授業では毎年「羅生門」を扱うのだが、その際に必ず目にするのが、芥川を激励する漱石の手紙である。多くの若者たちに慕われた漱石であるから、彼らの作品に目を通すだけでもたいへんな労力を要したであろうに、芥川に宛てられた手紙のなんと丁寧なこと。選び抜かれた言葉の端々からは、「師」の風格が漂っている。尊敬する大作家

からあの手紙を受け取った芥川の興奮は、想像に難くない。芥川を挙げた後に甚だ恐縮ではあるが、私自身も、尊敬する方からの言葉に心を奮い立たせていただいた経験がある。それは他でもない、長く川端康成学会を支えてくださった羽鳥徹哉先生からのお手紙である。

もうずいぶんと前のこと、大学の卒業論文で「山の音」を取り上げ文学の面白さに目覚めた私は大学院への進学を希望していたが、諸事情によりそれは叶わず、かろうじて得た職に就き、文学とは接点のない生活を送っていた。いつか改めて学問の道を志したいと考えていた時、成蹊大学出身の知人が羽鳥先生のゼミに所属していたことを知る。偶然、数日後に研究室に伺う予定があると聞き、憧れの羽鳥先生にお会いしたいと、自身の卒論を握りしめて同行させてもらった。内容は粗く拙く、しかも手書きの原稿用紙が百二十枚。「ご指導いただきたい」と差し出した世間知らずの私の論文を、羽鳥先生はあの飄々とした温かさで、受け取ってくださいました。それか

ら数日後、自宅に分厚い茶封筒が届く。差出人は羽鳥徹哉先生。ドキドキしながら開封すると、丁寧な添削が施された私の卒論と、先生からのお手紙が入っていた。とても面白く読んだ、今度公の場で発表してみなさい、ぜひこれからも研究を続けなさい——。尊敬する羽鳥先生からいただいた激励の言葉は、先の見えない霧の中に立たされていた私の、輝く道しるべになった。

その後私は、一念発起して教職に就いた。教員経験を経て大学院へ進学された羽鳥先生の背中を追うように、働きながら修士課程にも通った。時間的な制約、自身の研究の行き詰まりなど、次々と立ちちはだかる困難をどうにか乗り越えることができたのは、学べるよろこびと、学べない悔しさを知っていたからだだろう。その後、文学研究から遠ざかった時期もあつたが、昨年には博士後期課程への入学も果たした。何度も投げ出しそうになりながら、またこうして学究の場に戻ってこられたことを、本当に幸せに思う。これもすべて、羽鳥先生がくださった道しるべのおかげ

である。羽鳥徹哉先生は素晴らしい研究者・文学者であり、「師」でいらした。私などには一生かけても到底近付けない偉大な「師」だが、その言葉はいつもいつまでも私の心に在り続け、行くべき道を照らし続けてくださるにちがいない。

△編集後記▽

三年ぶりに「会報」をお届けします。今号は昨年（平成二十五年）の茨木・京都文学踏査の報告を中心に編集しました。今後は年一回発行しますので、会員の皆様のご協力をお願い致します。

（担当）田村嘉勝・野末明・原善

事務局：〒24480005

神奈川県鎌倉市雪の下三一

八一三十三

銀の鈴社内

- 1 採録文献は、1 単行本、2 雑誌特集号、3 雑誌・新聞・単行本所収論文、4 資料その他、5 学会研究会等での口頭研究発表、と大別した。
- 2 単行本は、著者（編者）、書名、発行年月日、発行所の順に記し、以下目次（論文・評論名）に従って記載した。その配列は発行年月日順とした。
- 3 その他目録は、論者、表題、発行年月（日）、発行紙誌、頁数の順に記した。
- 4 口頭研究発表は、発表者名、発表題目、発表年月日、発表機関、発表場所の順に記した。

1 単行本

馬場重行編『川端康成作品論集成第七巻 千羽鶴』（平24・1 A5判 275p 6800円）

青野季吉・佐藤春夫・中村光夫「創作合評（抄）」9p

磯貝英夫「川端康成一「山の音」「千羽鶴」一」11p

高田瑞穂『千羽鶴』13p

トーマス・E・スワン（武田勝彦訳）「千羽鶴」論（その二）」5p

月村麗子『千羽鶴』とその続篇「波千鳥」について」8p

羽鳥徹哉「千羽鶴」における川端康成」6p

三好行雄「川端康成「千羽鶴」」6p

上田真「見えない痣に呪われて—小説「千羽鶴」の一解釈」9p

川嶋至「千羽鶴」論」6p

オクナー・深山信子「千羽鶴」にみる感覚材料の用い方」10p

吉村貞司「千羽鶴」9p

鶴田欣也『千羽鶴』14p

深澤晴美『千羽鶴』のゆくえ—『波千鳥』試論—」10p

上田真『千羽鶴』『波千鳥』を読む—作品構造と人物関係—」12p

原善『千羽鶴』論」20p

大坪利彦『波千鳥』論—続『千羽鶴』としての問題点—」18p

山田吉郎『千羽鶴』論—茶室の磁場—」4p

高橋真理「千羽鶴」論—菊治の「あざ」—」14p

山中正樹「千羽鶴」論—「美」と「醜」との相克—」14p

永栄啓伸「菊治の誤算—川端康成『千羽鶴』の時間—」14p

石川巧「観光小説としての『波千鳥』〔抄〕」25p

馬場重行「千羽鶴」研究文献目録」8p

同上「千羽鶴」研究史」18p

森晴雄『川端康成『掌の小説』論—「有難う」その他』（平24・3旧四六判277p2400円 龍書房）

「掌の小説」論

「木の上」—恋人たちの秘密

「地」—「恐ろしい言葉」と「神の幻」

「舞踊靴」 — 谷崎潤一郎「富美子の足」に触れつつ
 「黒牡丹」 — 働かない女
 「望遠鏡と童話」 — 「異国姉妹」と「神の眼」
 「盲目と少女」 — 自分の生活
 「舞踊会の夜」 — 「思ひ出のしみ」
 「鶏と踊子」 — 「夜鳴き」と「変な男」
 「楽屋の乳房」 — 感覚的な憎しみ
 「空家」 — 「愚かな空想」
 「舞踊」 — 「一つの体」
 「鉄の梯子」 — 「新しい恋」
 「門松を焚く」 — 泥棒、別れ話など
 「白粉とガソリン」 — 踊子・小娘・少年
 「有難う」 — 乗合自動車の日常
 「朝の爪」 — 白い花嫁
 「二十年」 — 「自由」と「圧迫」
 「火に行く彼女」 — 「私の感情」
 「胡頹子盗人」 — 「伊豆の娘」に触れつつ
 「駿河の令嬢」 — 少女と女工
 「恐ろしい愛」 — 愛の天罰
 「玉台」 — 自身の神経
 「バッタと鈴虫」 — 「一つの童話」
 「月」 — 「短篇集」に触れつつ
 『一草一花』をめぐって
 「初出一覧」
 「後記」
 『掌の小説』一覧

川端康成学会編『川端文学への視界 27』（平 24・6 旧四六判 191p 2500円 銀の鈴社）

・追悼 羽鳥徹哉会長

川端香男里「弔詞 羽鳥徹哉さん」2p

林武志「羽鳥さんと学会の思い出」2p

竹内清己「正しき人の正しき川端・川端文学研究の護法善神 — 羽鳥徹哉氏を悼む — 」3p

田村充正「羽鳥先生追悼」2p

森本稜「心あたたかで親切だった羽鳥徹哉先生」2p

田村嘉勝「邂逅、そして惜別」2p

山田吉郎「覇気と繊細さと — 羽鳥徹哉先生追悼 — 」2p

森晴雄「羽鳥さんの仕事」2p

東弘毅「羽鳥先生と「川端文学を読む会」」2p

堀内京「「雪国」を読む」が授けてくれたもの」2p

佐藤翔哉「葬儀記」2p

西野真由美「羽鳥先生とのお別れ」2p

平山三男「作家になりたかった羽鳥さん」3p

・論文

佐々木寛「金糸雀」はいかにつくられているか」11p

金森範子「『十六歳の日記』に残された〈西方寺〉—「篝火」と「十六歳の日記」に読む」15p

館健一「初期川端文学における時間の概念—方法としての「空想」—」12p

李聖傑「川端康成『舞姫』における「魔」の様相について—占領、舞踊、そして「魔界」

14p

李明記「同時代評から考える川端文学—『雪国』の時代における「文芸時評」—」17p

石川則夫「小説の時間—「ざくろ」と「笹舟」に触れて—」16p

・資料紹介

岡本和宜「川端康成全集未収録文三編及び書簡二通」6p

深澤晴美「川端康成全集未収録文—水盛源一郎（水守三郎）『湖畔舞台』序等三篇—」11p

宮崎尚子「川端康成「生徒の柩をのせて」について」9p

・川端康成文学碑

高比良直美「川端康成文学碑 第十回 梶井基次郎文学碑と副碑 静岡県伊豆市湯ヶ島」13p

・書評

佐藤翔哉「仁平政人著『川端康成の方法-二〇世紀モダニズムと「日本」言説の構成-』」2p

山田吉郎「中嶋展子『川端文学の「をさなごころ」と「むすめごころ」-昭和八年を中心に-』」

2p

・研究動向

福田淳子「川端康成研究展望 二〇一一・一～二〇一一・一二」9p

田村嘉勝「川端康成研究文献目録（二〇〇九年）7p

堀内京「川端康成関係行事・刊行一覧（二〇一一年）4p

佐藤翔哉編「学会記録（平成二十三年度）」1p

野末明・片山倫太郎「編集後記」1p

2 雑誌特集号

「特集 佐多稲子と川端康成」（平24・11「芸術至上主義文芸 38」芸術至上主義文芸学会）

田村嘉勝「佐多稲子と「レストラン洛陽」—「夏江」と伊藤ハツヨと川端康成と」7p

中嶋展子「佐多稲子『時に佇つ』論—川端康成文学賞・受賞作「その十一」を中心に」10p

森晴雄「川端康成『骨拾ひ』（掌の小説）論—祖父の生と死」6p

李聖傑「川端康成『千羽鶴』における「魔界」—「内魔」の生死と深化を中心に—」9p

深澤晴美「川端康成と横光利一、その一断面—『川端康成全集』未収録文二篇に沿って—」10p

高比良直美「森晴雄著『川端康成「掌の小説」論—「有難う」その他』」2p

野末明「中嶋展子著『川端文学の「をさなごころ」と「むすめごころ」—昭和八年を中心に』」2p

3 雑誌・新聞・単行本所収論文

森本稜「魔界の住人—川端康成 第四十一回—その生涯と文学—（平24・1「文芸日女道」

524) 27p

森晴彦「反『伊豆の踊子』としての『富嶽百景』— 共通する再生の旅と離反する恋愛—」（平 22・1～2「解釈」）8p

山中正樹「削除された「過去」／「過去」との〈再会〉— 川端康成「再会」論—」（平 22・1～2「解釈」）9p

李聖傑「川端康成『山の音』における「魔界」思想の位相— 戦争の影、戦後の世相、そして異界の構築—」（平 22・1～2「解釈」）10p

森本穂「魔界の住人— 川端康成 第四十二回— その生涯と文学—」（平 24・2「文芸日女道」525）17p

川田宇一郎「川端康成の憂鬱」（平 24・2『女の子を殺さないために』講談社）64p

原善「『木曜組曲』のてんまつ— 恩田陸と川端康成—」（平 24・2『現代女性作家読本④恩田陸』鼎書房）6p

野呂芳信「「冬近し」論—川端康成「掌の小説」を読む—」（平 24・2「文学論藻」86 東洋大学）14p

森本穂「魔界の住人— 川端康成 第四十三回— その生涯と文学—」（平 24・3「文芸日女道」526）32p

東雅夫「川端康成 心霊と性愛に憑かれたまま」（平 24・3『文学の極意は怪談である』筑摩書房）16p

田村嘉勝「川端康成と井上靖— 人間そして作家」（平 24・3「言文 59」福島大学）13p

仁平政人「川端康成と二〇世紀モダニズム」（平 24・3「弘前大学 国語国文学」34）24p

宮崎尚子「川端康成「生徒の肩に柎をのせて」注釈」（平 24・3「方位」29）9p

山中正樹「川端康成における言語の到達不可能性について— 川端康成の言語観（三）—」（平 24・3「日本語日本文学」22 創価大学）16p

登尾豊「川端文学の錯誤」（平 24・3「中京国文学」31）6p

森本穂「魔界の住人— 川端康成 第四十四回— その生涯と文学—」（平 24・4「文芸日女道」527）27p

森本穂「魔界の住人— 川端康成 第四十五回— その生涯と文学—」（平 24・5「文芸日女道」528）18p

森本穂「魔界の住人— 川端康成 第四十六回— その生涯と文学—」（平 24・6「文芸日女道」529）17p

田村嘉勝「「芥川賞」選評にみる井上と川端の見解— 両者の小説のありようを垣間見る—」（平 24・7「井上靖研究 11」井上靖研究会）10p

森本穂「魔界の住人— 川端康成 第四十七回— その生涯と文学—」（平 24・7「文芸日女道」530）34p

谷口幸代「川端康成「バッタと鈴虫」—（掌の小説）と〈掌の童話〉—」（平 24・8「日本文学」）8p

仁平政人「「ダダ主義」と「新感覚派」のあいだ— 川端康成「新進作家の新傾向解説」再考—」（平 24・8「川端康成学会第 157 回例会 横光利一文学会第 12 回研究集会 予稿集」）6p

高橋幸平「横光利一「感覚活動」と表現主義」（同上）8p

- 須藤宏明「アヴァンギャルドとサタイヤ — 『文芸時代』と合評会を中心に — 」(同上) 6p
- 十重田裕一「横光利一における「新感覚派」と前衛映画」(同上) 5p
- 森本稜「魔界の住人 — 川端康成 第四十八回 — その生涯と文学 — 」(平 24・8「文芸日女道」531) 34p
- 森本稜「魔界の住人 — 川端康成 第四十九回 — その生涯と文学 — 」(平 24・9「文芸日女道」532) 34p
- 福田和也「正気と狂気の狭間の架空の病 川端康成『たんぼぼ』」(平 24・9『病氣と日本文学 近現代文学講義』洋泉社) 23p
- 森本稜「魔界の住人 — 川端康成 第五十回 — その生涯と文学 — 」(平 24・10「文芸日女道」533) 31p
- 森本稜「魔界の住人 — 川端康成(拾遺1) 第五十一回 — その生涯と文学 — 」(平 24・11「文芸日女道」534) 11p
- 同上「魔界の住人 — 川端康成(拾遺1の2) 第二十六回 — その生涯と文学 — 」(平 24・11「文芸日女道」509) 8p
- 森本稜「魔界の住人 — 川端康成(拾遺2) 第五十二回 — その生涯と文学 — 」(平 24・12「文芸日女道」535) 5p
- 同上「魔界の住人 — 川端康成(拾遺2の2) 第十一回 — その生涯と文学 — 」(平 24・12「文芸日女道」535) 8p
- 千葉俊二「ポルノグラフィとしての「雪国」」(平 24・12『物語のモラル』青蛙書房) 24p

4 資料その他

- 川端香男里・平山三男・水原園博「文豪が蒐集した美の世界 川端康成コレクションへようこそ」(平 24・1・21「週刊現代」) 6p
- 無署名「芥川賞77年「全舞台裏」」(平 24・2・2「週刊文春」) 4p
- 山崎まゆみ「越後湯沢温泉 新潟・湯沢」(平 24・2・4「河北新報」) 1p
- 無署名「川端康成旧制中学時代執筆の文章 初掲載雑誌を発見」(平 24・2・20「河北新報」) 1p
- 仁平政人「余滴「川端康成とモダニズム」という視座」(平 24・2「横光利一文学会 会報」) 20) 2p
- 無署名「菅野春雄著 誰も知らなかった「伊豆の踊子」の深層」(平 24・3・4「河北新報」) 1p
- 館健一「川端康成「片腕」試論」(平 24・4・1「会報」116 日本近代文学会) 2p
- 堀内京「パネル発表「メディアの浮上するとき—作品におけるその諸相」印象記」(同上) 1p
- 奈良林和子「没後40年 川端康成が愛した女性と死の真相」(平 24・4・22「サンデー毎日」) 3p
- 矢島裕紀彦・内田清子「一読すれば日本の文壇史がわかる」(平 24・5「サライ」) 21p
- 無署名「川端康成 書の世界展」(平 24・5・3「宮崎日日新聞」) 1p
- 無署名「書は語る 文豪の美意識」(平 24・5・27「愛媛新聞」) 1p
- 無署名「川端康成 書にも才能」(平 24・5・30「西日本新聞」) 1p
- 武村岳男「越後湯沢 雪国文学散歩道」「踊子歩道 天城峠越え」(平 24・6『本好きのためのウォーキング入門』平凡社新書) 12p
- 無署名「川端康成の書 繊細な美意識」(平 24・6・7「中国新聞」) 1p
- 無署名「奔放に繊細に川端康成の書」(平 24・6・12「河北新報」) 1p

- 梅田卓『横光利一の心のふるさと公園・跳ね釣瓶の庭』(平24・7 私家版) 37p
- 板根武「川端康成「美しい日本の私」」(平24・7「文芸日女道」530) 2p
- 星野学「川端康成の未発表小説」(平24・7・14「朝日新聞」) 1p
- 無署名「川端康成 未発表作を確認」(平24・7・20「産経新聞」) 1p
- 森本穂『魔界の住人 川端康成』読者に告ぐ」(平24・8「文芸日女道」531) 1p
- 渡辺亮一「川端康成の“未発表作”展示中」(平24・8・16「毎日新聞」) 1p
- 後藤泰良「英美子の手紙 半世紀ぶり再会」(平24・8・18「朝日新聞」) 1p
- 田中励儀「研究発表(二日目午前)」(平24・9「会報 117」日本近代文学会) 1p
- 仁平政人「研究発表」(同上) 同上
- 中村真理子「川端康成、ノーベル賞7年待ち」(平24・9・22「朝日新聞」) 1p
- 岡崎武志「川端康成 浅草で見つけた「大阪」」(平24・10『上京する文学』新日本出版社) 10p
- 金森範子「川端文学 「時代の祝福」を読む」(平24・11「小品」小品の会) 10p
- 金森範子「川端文学 「西国紀行」と「時代の祝福」(同上) 8p
- 壬生篤編「文豪 永井荷風」(平24・12 徳間書店) 102p
- 山中正樹『魔界の住人 川端康成』最終回を読んで」(平24・12「文芸日女道」535) 2p
- 5 学会研究会等での口頭研究発表
- 常思佳「川端康成と関東大震災」(平24・4・21「川端康成学会」第156回例会) 於・鶴見大学
- 森本穂「川端康成〈魔界〉の終焉 - 「不死」「雪」から「隅田川」まで - 」(同上) 同上
- 田村嘉勝『伊豆の踊子』を読む」(平24・5・21「第27回文学講座「再読! 熟読! 川端文学 その一」」 於・茨木市立川端康成文学館併設上中条青少年センター)
- 館健一「川端康成「片腕」試論」(平24・5・27「日本近代文学会 春季大会」) 於・二松学舎大学
- 竹内清己「モダニズム時代の文芸時評」(平24・6・8「第27回文学講座「再読! 熟読! 川端文学 その一」」 於・茨木市立川端康成文学館併設上中条青少年センター)
- 林武志「川端康成と源氏物語 - 「浮舟」と日本伝統文化(結界の中の鎮魂) - 」(平24・6・10「川端康成学会 川端康成没後40周年記念大会」) 於・鎌倉市生涯学習センター
- 伊井春樹「川端康成にとって源氏物語とはどのような存在だったのか」(同上) 同上
- 平山三男『雪国』の味読と成立の秘密」(平24・6・22「第27回文学講座「再読! 熟読! 川端文学 その一」」 於・茨木市立川端康成文学館併設上中条青少年センター)
- 福田淳子『名人』を読む」(平24・9・26「第27回文学講座(後期)「再読! 熟読! 川端文学 その二」」 於・茨木市立川端康成文学館併設上中条青少年センター)
- 杉井和子『千羽鶴』を読む」(平24・10・17 同上)
- 林武志『眠れる美女』を読む」(平24・10・29 同上)
- 東雲かやの「読むこと」と「読まれること」(平24・11・25「全国大学国語国文学会」第106回大会) 於・中京大学
- 佐藤翔哉「「青い海黒い海」 - 「私」と「作者」の接続性 - 」(平24・12・22「川端康成学会」第158回例会) 於・鶴見大学
- 田村充正「川端康成「山の音」と小津安二郎監督『晩春』 - 小説と映画のあいだ - 」(同上) 同上